

総合科学系地域協働教育学部門の廣瀬淳一准教授らの研究成果が、
国際誌『Economic Analysis and Policy』に掲載されました

総合科学系地域協働教育学部門の廣瀬淳一准教授、高知工科大学の小谷浩示教授及び九州大学の馬奈木俊介教授による「SDGs」に関する研究成果が、オランダ ELSEVIR 社の学術誌『Economic Analysis and Policy』に掲載され、令和5年6月12日に電子版が公開されました。

○ 概要

近年、持続可能な開発目標(SDGs)を達成することは、世界の人々のミッションの一つとなりつつあります。これまでは、SDGs と「次世代への関心や行動 (ジェネラティビティ)」及び「幸福度 (ウェルビーイング)」の向上との関連性が報告されていましたが、どのようなタイプの人や社会が SDGs を達成する可能性が高いのか、あるいはその道筋を歩みやすいのかについては、ほとんど知られていませんでした。

廣瀬准教授らは、「ジェネラティビティ」及び「ウェルビーイング」が SDGs を達成するために必要な指標とみため、「インクイジティブネス (※)」の高さが「ジェネラティビティ」の高さを決める重要な要因であることを検証するため、「インクイジティブネス」と認知的・非認知的・社会人口統計学的要因との関係性について分析しました。また、日本で行われた同様の調査と比較する為に、調査実施地として伝統的な価値を残すパラオ共和国を選び、「自律性 (社会的圧力を押しつけて自分で意思決定する割合)」を測る尺度を追加しました。

母系社会の伝統を残すパラオ共和国で、パラオ人 413 人を対象に経済実験とアンケート調査を実施したところ、

- 1) 「ジェネラティビティ」を特徴づける上で「インクイジティブネス」が重要な役割を果たしていること
- 2) 「ジェネラティビティ」の高さは「ウェルビーイング」の高さを決める重要な要因であり、かつ「ジェネラティビティ」は「インクイジティブネス」と「ウェルビーイング」の媒介者としての役割を果たしていること
- 3) 伝統組織の社会的圧力が存在する環境においても、人々が新奇性を求め、変化に適応するための「自

PRESS RELEASE

令和5年6月27日

律性」を持つことが「ジェネラティビティ」及び「ウェルビーイング」の向上につながっていることなどが明らかになりました。

この結果から、異なる価値観や考え方、様々なバックグラウンドを持つ人々が互いを認め合い、自分を自由に発信することができる「ダイバーシティ（多様性を許容する）社会」の重要性や、このような社会変化を受け入れることで人々のウェルビーイング向上に繋がることが、統計的に示されました。

今後、世界中で様々な特徴を持つ社会において SDGs を達成するため、この研究成果の活用が期待されます。

是非、取材方よろしくお願い申し上げます。

※インクイジティブネス・「新奇性を求める態度」及び「社会や環境の変化への適応」を包括した概念として定義されたもの

○ 論文情報

<論文名> Do autonomy and inquisitiveness contribute to SDGs? Implications from the matrilineal island of Palau

<和訳> 「人々の自律性と社会や環境の変化への適応はSDGsに貢献するか？ 母系社会の島嶼国パラオからの示唆」

論文掲載URL : <https://doi.org/10.1016/j.eap.2023.06.001>

○ 本件問い合わせについて

高知大学 教育研究部 総合科学系 地域協働教育学部門 准教授

安全・安心機構 男女共同参画推進室 室長

廣瀬 淳一

Mail : hirose-junichi@kochi-u.ac.jp

Tel : 088-888-8020